明るく照らされた道

追夢叶秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明るく照らされた道

【Ｎコード】
Ｎ５６３２Ｓ

【作者名】
追夢叶秋

【あらすじ】
６月というわけのわからないタイミングで山豊高校に転校した、萩原明（はぎわらあきら）。
実は、その転校は彼の波瀾万丈の始まりだった。

プロローグ（前書き）

プロローグから、お楽しみ下さい？？

プロローグ

新しく、小学校から中学校。中学校から高校。人によっては最終的に大学にも行くことになるがそのたびに人が必ず経験するのが「一期一会」だ。
別れは、比較的楽にすむだろうが出会いはそうもいかない。世界は広い。いろんな奴がいて自分の苦手な人も必ずいるだろう。

しかし。
今、話したのは人がかならず経験しなくてはいけない事だ。それが耐えられないなら「進級」などもっての他だと俺は思う。

別にこんな感じで調子にのってる奴が近くにいたわけじゃない。正確に言うなら俺は今、あまり経験したくない方の「出会い」を経験しようとしている。

「今日からオマエ等と一緒のクラスメイトになる、萩原明君(はぎわらあきら)だ。仲良くしろよ」
どこかの小説に出てきそうな体育会系の熱血先生がかなりザックリと俺の紹介をした。
「萩原・・・明です。よろしくお願いします・・・」今日から俺は家庭の事情により6月という微妙なタイミングでここ、山豊高校に転校することになったのだ。

プロローグ（後書き）

第二話・・・・・

明の新しい事実が・・・・・

なんと台風の目的な新キャラも・・・

第一話「出会い」（前書き）

明くんに訪れる、初めての「出会い」です？？？？？

よろしくお願いします。

第一話「出会い」

第一話「出会い」
ここ、山豊高校に来た初日がそろそろ終わると思われる時。この学校での最初の出会いが起きた。

教室での俺の机は、幸いにも窓側の一番後ろというそれなりにいい席を手に入れた。この席になれたのは転校生の特権だと先程の熱血先生が語ってくれた。
そんな密かに気に入りだした席で帰る準備をしている俺に三人の男の子が声をかけてきた。「よっ！転校生♪」ノリの良さそうな好青年と、
「おい。いきなりよっ！はないだろ」それに慣れた口調で突っ込みを入れるイケメンと、
「まあまあ。大樹君らしくていいじゃない」一瞬、女に見えるくらい気の弱そうな男の子。
その三人の後ろには、隠れている（そういうにはほど遠いが）クラスの人達を見えるかぎりこの三人がクラスの代表らしい。
「あぁ～と・・・・自己紹介・・・した方がいいのか？」俺に話し掛けてるのに三人で盛り上がりはじめているようなのでこっちから聞いてみた。
「いや。こっちからしよう。前田大樹（まえだだいき）だ。よろしくな」好青年＝前田大樹は、汚れの一切ない笑顔で握手を求めてきた。
「よろしく」とりあえず握手を受けておこう。
「自分は加賀村総司（かがむらそうじ）という。よろしく」大樹の突っ込みをしていたこいつは、どう見ても頭が良さそうだ。なんかこう・・・・・眼鏡をかけたらかなりのインテリ系なりそうな感じだな。「あっ！えぇ～と・・・林隆太（りんりゅうた）って言います。よろしくお願いします・・・・」大丈夫か？この子・・・・・。驚かしたら、ぶっ倒れるんじゃね？

「こいつは、すごい特技があんだぜ」大樹がまるで自分の事のように語りだした。
「驚かせると、ぶっ倒れるんだ！」予感的中！？
「ウソだけどな♪」・・・・・バコッ！
「テメ・・・・・始めて会ったのにいきなり叩くか普通」しまった。なんとなく叩きたくはなったけど本当に叩いちまった・・・・・。
「悪い。なんとなく叩きたくなってな」悪い事をしたら謝る。常識・・・・・だと思う。
「まぁ、こっちもその方が何かと楽だしいいか。よろしくな。てん・・・・・じゃなくて・・・・」
「萩原明だ。こちらこそよろしく。」

こいつらと知り合って分かった事は、別にこいつらがクラスの代表じゃなくただ「転校生」に興味を持った、野次馬だった事だ。
「ここが音楽室。明は、選択なんだっけ？」あの自己紹介の後。三人は、俺の学校まわりに付き合ってくれた。
「音楽だ。一応ギターをやっててな」別に隠すことじゃないな。
「明は、ギターかぁ。確か隆太がやってんのは・・・」
「ベースだよ。ギターはどうも出来なくてね」
「実は、俺もベースだけはどうも出来ないんだ。なんかこう・・・イライラするしな」
「転校生の萩原くんが君みたいな子でよかったよ」さっきまで黙って何か考え事をしていた総司が口を開いた。
「そういやぁさっき廊下でもそんな事言ってたけど、お前等が野次馬だった事となにか関係があんのか？」

「明って以外に人見知りしないタイプか？」
「隠してもどうもならないし言ってみればどう？」隆太君。その台詞はあまり使わないほうがいい。まるで言っちゃいけないけど言いたいみたいに聞こえるから。
「ここでは、ダメだな。近所の公園まで行こう」つい先程までボケ倒していた大樹が急に真面目な顔になった。
「ただ事・・・ではないみたいだな」

公園は、いつもそうなのか驚くほど人が居ない。
「まぁ、座りたまえ」俺等四人は、公園の途中にあったコンビニでそれぞれ、おやつ的な物を買っていた。因みに俺は、ちょっとしたスナック菓子だ。
「んで、わざわざココまで来たんだ。あまり聞かれたくない事何だろ？」ベンチに座りながらなぜか座らずにまわりをキョロキョロしている三人に俺は、話し掛けた。
「聞かれたくない事と言うよりかは・・・・・とにかく中身を話したらわかってもらえると思う」三人の中で一番語りがうまいであろう総司が静かに語りだした。

第一話「出会い」（後書き）

早めに第二話を書き上げたいと思っています？
これからも明くんともども追夢叶秋（おいゆめとあき）をよろしくお願いします？

第二話「『否まとも』」（前書き）

だんだんあかされていく山豊高校の秘密。
明は、それ以上に大切な初めての事を体験する

第二話「『否まとも』」

「もしもし亀よ亀さんよ♪世界のうちでお前ほど歩みの鈍い者はない♪」

ベットの中でうずくまるように萩原明(はぎわらあきら)はその音の遮断活動にのりだした。

「う・・・うるさい！」

「もしもし亀よ亀さんよ♪」ケータイより流れている目覚まし用アラーム音はついに一度歌い終わり・・・・少したつとまた歌いだした。

「曲、変えようかな？」

寝ぼけながらもベットから起き上がり、辺りを見渡した。どうやら、ギターに添い寝する形で寝ていたらしい。

ピンポーン！！

「明っち！朝だよ！」

俺のあだ名ってやっぱこれなんだな・・・・・。そう思いながら明は、初めてこのあだ名で呼ばれた時を思い出した。

「んじゃあ、明日の朝から毎日迎えに行くから。よろしくな・・・明っち♪」すべてを話し終えた後。俺は、家まで送って（いや勝手についてきただけだが・・・・・）もらった。
「ちょっとまて。なんだその変な呼び方は？」気になったら聞く。常識だ・・・・たぶん。
「変な呼び方とはなんだね！君の為に我々三人で決めたあだ名なのに」顔を近付けるな！しかも変な笑顔を浮かべるな。
「あきらめたまえ」しかも・・・・・
「諦めた方がいい」三人して・・・・・
「残念な事なんですけどね」
「笑顔をうかべて近づいてくるな！」バコッ！バコッ！バコッ！

「本当に迎えに来たんだな。とにかくあがれよ」扉を開けると嫌になるほど満面の笑みを浮かべる大樹がいた。
「なんだね、その不機嫌そうな顔は」頼む。言わせないでくれ。
「不機嫌にさせてんのは、どこのどいつだよ？」
「はてな？誰だろうか？」

「昨日の話は、覚えてくれているかな？」
「忘れたくてもあんなインパクトの大きい話、わすれられねぇよ」
転校先がココまで大変な事を抱えてる学校だったなんて不幸にも程がある。昨日の夜から明が思ってる事だ。しかも登校の時に隣にいるのがこんな体育会系の奴であると思うと尚更悲しくなる・・・・・。
「安心したまえ、明っち。昨日の話からわかったように属にいう『まとも』な人間は、まだ居る」
『まとも』な人間と
『否まとも』な人間。
生徒をこんな風にあからさまに分けられる学校はここ、山豊高校だけだろうと明は、思う。ここまではっきりと分かってしまうのは、悲しいことだが仕方がないのだ。この学校では、仕方がないのだ。
「その、まだ居るとかいう奴もお前等みたいのだったら真っ平ゴメンこうむるぞ」

「それじゃあ、話すよ」
昨夜公園で話しだしたのはあの三人の一人、林隆太（りんりゅうた）だった。

「おう。頼むわ」
「他の二人に話させると話がずれていくこともなきにしもあらずなので自分が話します」
「了解した」
隆太は、そう言うといっぱくおいて語りだした。
「正直なところ、なんで『否まとも』な生徒が出来てしまったのか僕らにもわからないんだ」
「そうなのか？」
「ああ。ただわかってることが一つもないってことでもないんだ」
「幾つかあるんだな」明は、隆太の目を見て察した
「うん。一つ目は、先生方の中にもこの『否まとも』な生徒をなんとかしたいって思ってる方とまるで自分も『否まとも』になったかのような先生がいるんだ。面倒な事に『まとも』な先生の方が極端に少ないんだ」
「うちの担任の熱血先生は、バカすぎて『否まとも』ってのが居るのも知らないがな」
「そんなにバカなのか！？確かに充分バカに見えるけどそんなになのか！？」大樹の一言は二人にとっては常識だが明にとっては、かなり衝撃的だった。
「だけど、実は僕らみたいに『否まとも』を真っ向から相手にしてるグループは他にもいくつかあるんだ。きっとどのチームも明日から君に接触してくると思うよ」疑問発見！気になる事は、即聞くべし。
「なんでだ？来たばかりで何も知らないのに俺と接触しても意味がないんじゃ？」
「確かに隆太の言う通りだな。たまには、正論も言うんだな」ずっと考え事に耽っていた総司が口を開いた。
「いつも正論言ってないのは、総司くんと大樹くんでしょ！！」
「あのさぁ・・・・・いい加減殴っていいか？」
「わかった、わかった。話すから・・・・・。何も知らないからこ

そ皆接触してくるんだよ。うまくいったら『否まとも』な生徒が誕生する瞬間が見れるんじゃないかってね」・・・・・・

「しかしだ。安心してくれ。少なくとも我々三人は、君を・・・明っちをそんな風に見てはいない」・・・・・あれ？今、なんか頬に冷たいものが・・・？

「あれ？明さん泣いちゃいましたよ？」

「お・・・・・おい！明っち！？どうしたのだ！？」

「大樹が泣かせたのではないのか？」

・・・・・・く・・・・クソ・・・。涙が止まんねぇ。

「・・・・・・この三人で一番情報を調べるのがうまいのは誰だ・・・・・？」

「た・・・多分総司だと思うが？」大樹の返答に軽く安堵。

「総司・・・。俺の事調べておいてくれ」

第二話「『否まとも』」（後書き）

どんどん書きますよ！！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5632s/

明るく照らされた道

2011年10月9日00時26分発行